

詩編 第41編 3節

「主は病の床で彼をささえられる。病むときにどうか彼を全くいやして下さるように。」

万人が経験する病の床である。病状は人それぞれ、仮に似ていたとしても、一つとして同じことはない。病の顛末も人それぞれである。しかし、万人を確実に襲う事象である。それだけにこの詩編の作者は必死に願う。彼のために願う。どのような繋がりを持つ者が病の床に伏せているのかはわからない。ただ、病からの解放、いやしをひたすら願っている。

病む者を襲う不安がある。病んでいる者にしかわからない孤独もある。そのとき、他の誰かが背後にあって病人を覚え回復を願っている事実を知ることは支えとなる。ましてや、ここにあるように、主は、と慰めの主、癒しの主、平安の主に向かいひたすら願ってくれる者が居ることを知るなら力強い支えとえとなる。

彼の支えとなる主に願い、病んでいる彼をいやして下さるように、それも全くいやして下さるようにと願う。主に、彼の病のいやしを願うが、同時に自分のときも願う主である。彼のために主に願い、その信頼がやがて自分が病んだときの信頼となる。病を通して、万全の信頼をもって願う主がおられることを全ての者の前で証言する。万人の病いの床の下から支え、それをのり越えさせて下さる主を。

2022年12月20日